

文の統合と文章構成に関する問題点

—日本語・日本文化研修留学生のレポートから—

中畠 容子

要 旨

大学レベルの日本語能力を有する文系の留学生が専門的なレポートにおいて考察を書く際の文の統合と文章構成の問題点を明らかにするため、2014～2015年度の京都大学日本語・日本文化研修プログラムに在籍した19名のレポートの下書きを調査した。その結果、Ⅰ) 文・文章間の係り受けの不備、Ⅱ) 論述の展開の不備、Ⅲ) 記述・説明の不備という問題点が認められた。このうち、Ⅱ) 論述の展開の不備の問題は、論理構成に関わる問題を含んでいると考えられる。実際に、Ⅱ) の例の中には、引用文献を無批判に自説の根拠として用いていると思われるものが存在しており、従来言われている無断使用の問題とは別の引用の問題が見られる。こうした論述の展開を行うということは、やはり「学術的なレポートとはどういうものか」という概念理解が不十分である可能性が高く、単に日本語能力の問題に留まらないと考えられる。

【キーワード】 アカデミックライティング、文章構成、文の統合、引用

1. はじめに

本稿の目的は、日本の大学院への進学も考えられる上級日本語学習者が、文系の専門的なレポートにおいて考察を記述する際の問題点の一端を明らかにすることである。本稿では、2014年10月から2015年6月にかけて京都大学日本語・日本文化研修留学生プログラムにおいて筆者が担当した作文授業で提出された19名のレポートの、特に本論の考察部分の下書き⁽¹⁾について、文の統合と文章構成に関わる問題点を取り上げる。学習者の母語は中国語、韓国語など五つの言語である⁽²⁾。以下で取り上げる例文については本人から引用許可を得ているが、学習者の特定を避けるため、また、問題点を明瞭にするため、原文を改変した部分がある。調査は、考察部分であっても資料の内容説明、或いは、先行研究の紹介に留まるもの、また、感想や印象批評など論理的展開を示していない記述については対象から外した。

本稿で扱う「文の統合」とは、文の成分間の対応を指し、「文章構成」は文と文との関係を指す。例えば、次の文・文章はこうした対応や関係が不適切な例である（下線・記号は筆者による。以下、

同様)。

- (1) 表からは、テストを行う際に、言語学習のどの領域に焦点を置いているかの傾向が見られる。
 (2) だが、作者が設定を変え主人公を貧しくしたとは考えにくいと思われる。そこで、原文はどうであろう。

例 (1) は、文の統合に問題のある文である。「表からは」という書き出しに対し、「(傾向が見られる)」で結ばれているが、「わかる／読み取れる」などが適当であろう。

例 (2) について、文意の理解のために補足しておく。この部分は、同一作品の二種類の日本語訳を比較したところ、主人公の人物像に違いが見られたが、原作者が改変したとは考えられないため、原文ではどうなっているかを確認してみる、という文脈での記述である。接続詞「そこで」が二つの文の間をつないでいるが、論理的関係に問題がある。「そこで」は、提起した問題に解決を与えるための方策を示すような文脈で使用するが、ここでは「原文はどうであろう」という問いかけで結ばれている。

以下では、こうした文の統合や文章構成に見られる問題点を整理していく。まず、従来指摘されている接続詞や指示詞などの文法的な統合の問題を、さらに、学習者にとってより高度な、複数の文を連ねることによって生じる構成上の問題を示す。なお、名詞・動詞・形容詞など概念語の選択の誤りについては、本稿では扱わない。適切な語彙の選択は無論重要であるが、論理構成は学術的レポートの絶対的要件であることから、論理的文脈の読み取りに支障を来す事例を考えたい。

2. 文の統合・文章構成上の問題点

調査した下書きには、A) ~ F) のような文の統合・文章構成上の問題点が認められた。これらの項目は単語レベルの問題から、文レベル、文章レベルの問題へと配列している。それぞれの項目名の後に例数を併記し、例を掲げる。例の一部については正用に改めた表現を【 】に入れて示したが、紙幅の関係から一部は問題点のみを記している。

A) 接続詞・接続助詞 17例

上記の例 (2) のような接続詞の選択の他、次の (3) のような接続助詞の問題、また、(4) の同一接続詞の連続使用も認められた。(3) の文脈では「が」は逆接と捉えられる。

- (3) K氏は、「俗世間を白眼視して山中に籠もり、詩作の苦しみのためにやつれる反俗の詩人として、○○は××の目に映じた」と論じたが、筆者は賛成する⁽³⁾。
 (4) また、情報が公開されても、インターネットと一般の布告に限られている。つまり、住民は意識的に情報を探さないと、情報に触れることが難しい。つまり、情報公開は積極的とは言えない。

B) 指示詞 8例

- (5) 留学先の学生と共同学習や共同研究するチャンスを与えない場合がしばしば見られる。文化交流の出発点からいうと、そのようなこと【→このようなこと／こうしたこと】は避けるべきだと思われる。

ここでは、指示詞は「留学生にチャンスを与えないこと」の言い換えであり、「その」は不適当である⁽⁴⁾。

C) 動詞の文法形式

動詞部分の文法形式は、事柄の時間的關係や対象間の關係、また、筆者の視点の理解に欠かせない要素である。これらに関する誤用については、正用に改めた表現のみを示す。

・テンス・アスペクト 11例

- (6) 加害者当人に対する反応はそれほど異なった【→異なっている】わけではなくても、加害者家族に対する苛烈なバッシングは少なくとも日本社会の性質から影響を受けているだろうと思われる。

・ムード 3例

- (7) 「この少年は、子供たちのあいだでも気味悪がられていた」と書いてあるが、原文を見れば【→原文を見ても】、当時誰かがこの少年を気味悪がっていたかどうかは分からない。

・ヴォイス 5例

- (8) 公費留学生をお客様扱いされる【→お客様扱いする】場合、或いは…（中略）…共同学習や共同研究するチャンスを与えない場合がしばしば見られる。

・モダリティ 2例

- (9) ○○の詩の方は一句で一つの場面を描き、全詩を通して自分がおかれた状況、自分の心境を切々と表現している。自分の心も孤独で寒いからこそ、一羽の鶴鴿を寒く見えるだろう【→一羽の鶴鴿が寒く見えるのだろう】⁽⁵⁾。

・その他 9例

- (10) たとえその行為は嫌がらせやいじめに見えても、行為の対象となった加害者側が【→加害者側を⁽⁶⁾】元々「悪」のような存在として認識することで、その「悪」に対する残酷な行為を正当化し、抵抗感や罪悪感を排除することもあるだろう。

D) 文の係り受け 10例

例 (1) の他、次のような例もある。

- (11) 大和の最後は片舷に集中攻撃を受け、最初の5°、その後の15°の傾斜を短時間で回復させた。

傾斜を回復させたなら、「最後」ではない。「大和の最後は」に対応する述語がない。

E) 論述の展開 8例

(12) 物語によると、皇子は自分自身で家を出て行くが、絵巻を見ると翁は強い身振りで皇子に出て行くことを命令している。この付け加えられた部分はどう解釈したらいいのか。物語より絵師は家長の権威を強調したと言える。

「どう解釈したらいいのか」という問題の提起に続く文章として、解釈に至る論証が期待されるが、直後に解釈が書かれてこの段落は終わっている。

(13) 今までの保存は行政主導で、積極的に参加する住民は少ない。その理由について、行政側が主導権を握り、住民に対して情報が十分に公開されていないということが考えられる。

一重下線部の「行政主導で」は「積極的に参加する市民は少ない」ことの理由である。二重下線部でも「その理由」として「行政側が主導権を握」っていることが書かれており、同じ理由が循環している。

F) 記述・説明の不十分さ 16例

(14) 自然環境と結合してみると、作者の憂国慨世の情を容易に感じ取ることができる。

これは段落末の文章であるが、どんな自然環境であるかの説明がなく、それと何とを結び付けているのかが明らかでない。

3. 論理構成と引用

前章で挙げた問題点は、大きく次の3点に集約できるのであろう⁽⁷⁾。

- I) 文・文章間の係り受けの不備：いわゆる文のねじれ・文章間のねじれである。接続詞や指示詞の他、述語のアスペクトなどの文法上の問題がある。…A)・B)・C)・D)
- II) 論述の展開の不備：あるべき論述がない、記述が循環するなど論述の展開に問題があり、論理的な筋道の把握がしにくい。…E)
- III) 記述・説明の不備：情報量が足りず、文脈の理解ができない。…F)

このうち、II)「論述の展開の不備」は、上級レベルの日本語を書く技能を持った留学生にとって、日本語だけの問題ではないと思われる。因他(2007)が学習者の書いた調査概要の調査によって示した「論文スキーマ」⁽⁸⁾の問題でもあろう。次に、このスキーマとも関わる、引用をめぐる「論述の展開の不備」の例と、その問題点を見ていく。

次の(15)では二つの音楽ジャンル(○○と△△)について、歌詞の比較を行っている。

(15) 表現方式において、○○の歌詞の特徴は、話し手の感情を控えめに表していることである。

a) それは、単なる歌詞の特徴より日本語の性格と見なしていいだろう。この点について、K氏は日本人の言語表現の特徴のひとつとして「日本人は、なるべく言うまい、書くまいとする。また、話したり書いたりしても、はっきりしない表現を好む。(後略)」とはっきりしない表現を指摘している。

なお、b) 日本人は、話し手からの積極的な表現を受け入れ、そこに感情移入するというところに楽しみを得るのではなく、話し手が書いた日記を、聞き手が覗き見するかのような作業を好むと言える (I氏)。このように△△と○○は、表現方式まで違いがあることがみられる。それは、言語の特徴やその国で好まれる表現方式が影響していると考えられる。

まず、a) の一重下線部で自らの見解が述べられ、続く二重下線部ではK氏の説が引用されているが、両者の関係が明確でない。本来なら二重下線部は、どうして「話し手の感情を控えめに表」すことが「日本語の性格」と見なせるのか、その根拠が示されるところである。その文脈で読むと、K氏の説をそのまま根拠として挙げていることになる。

次の段落冒頭の接続詞「なお」はここでは措くことにして、b) は文末で先行研究の要約であることが分かる。後続文は「このように」で始まっているが、b) からは飛躍した内容となっている。それは、b) と「このように」との間に必要なI氏の説に対する自己の解釈、及び△△と○○との相違に関する考察という推論過程が欠落しているためである。次の「それは」の文では、○○の表現方式をK氏やI氏の説に拠って短絡的に説明付けようとしており、ここでも先行研究の内容をそのまま受け入れ、根拠としているように見える。

引用については、これまで主に剽窃の問題が取り上げられてきたが⁽⁹⁾、本稿で示したのはそれとは異なるケースである。引用元が示されているが、引用内容を援用しての論理構成に問題がある。本稿では典型的な例しか挙げ得なかったが、類例はこの学習者以外にも見られた。ここで推測したように、先行研究を無批判に根拠と見做しているのだとすれば、研究活動における錯誤となる。今後は、学習者の先行研究の扱い方を更に精査するとともに先行研究に対する批判力を養うような学習方法を考えていく必要があるだろう。

注

- (1) レポートは、各自の自由テーマ（但し、日本に関わる内容）による8000～10000字の論証型レポートである。完成稿の提出までに部分的な下書きと全体を通して書いた下書きの添削を経ているが、本稿では、基本的に他者の目を通していない段階の下書きを調査した。
- (2) 母語の内訳は、中国語母語話者9名、韓国語母語話者7名、タイ語母語話者・ドイツ語母語話者・オランダ語母語話者各1名であるが、今回の調査では母語を反映していると判断できる誤用傾向は認められなかった。
- (3) 例(3)は「論じている」とすべき表現を「論じた」としており、アスペクトにも問題がある。
- (4) 庵(1995)「コノとソノ－文脈指示の二用法－」など。(5)の例は、文脈によっては日本語母語話者にも許容されるが、論文の文体としての適切さにおいては劣る。
- (5) 「ノダ」だけでなく、格助詞「を」と「が」の問題もある。
- (6) 「認識する」のヴォイスの問題として捉え、正用を「認識される」と考えることもできるが、文末の「排除することもあるだろう」から、主語は「嫌がらせやいじめを行う者」と見なした。従って、厳密には動詞の文法形式の問題ではないが、便宜上ここに含めた。
- (7) 村岡(2010)によると、村岡他(2008)において文系・理系留学生及び日本人理系大学院生が書

いた文章の論理構造の問題として、1) 序論と結論の整合性、2) 段落内外の結束性、3) 段落間の関連づけ、4) 引用の問題が指摘されている。村岡他（2008）は、専門日本語教育学会第10回研究討論会の発表要旨集で学会HPでも公開されていないため筆者未見だが、本稿と一部同趣旨の指摘がなされている。

- (8) 因他（2007）は、「研究とは、また、研究論文とはどのようなものか」という認識を「論文構造スキーマ」と規定している。村岡（2014）では「研究とは何か、論文とは何か」に関する概念知識の総体を「論文スキーマ」と称している。
- (9) 二通（2006）、村岡、因他（2007）、村岡（2010）。

参考文献

- (1) 庵功雄（1995）「コノとソノ－文脈指示の二用法－」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』，くろしお出版，pp.619-630
- (2) 因京子、村岡貴子、米田由喜代、仁科喜久子、深尾百合子、大谷晋也（2007）「日本語専門文書作成支援の方向——理系専門日本語教育の観点から——」『専門日本語教育研究』第9号，pp.55-60
- (3) 二通信子（2006）「アカデミック・ライティングにつながるリーディングの学習」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』，ひつじ書房，pp.99-113
- (4) 村岡貴子、因京子、米田由喜代、仁科喜久子（2007）「理系大学院レベル留学生のライティングに関する問題の調査・分析——日本語論文作成支援リソース開発のために——」『2007年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.101-106
- (5) 村岡貴子（2010）「専門日本語ライティング能力の養成を旨とする学習課題の捉え方」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』14，pp.49-56
- (6) 村岡貴子（2014）『専門日本語ライティング教育 論文スキーマに着目して』，大阪大学出版会

（京都大学国際交流センター・非常勤講師）

Problems Regarding Sentence Structure and Argumentation in Academic Papers in the Humanities

Yoko Nakashima

Abstract

This paper clarifies problems concerning sentence structure and development of argumentative parts in academic papers that were written by students in the humanities department. This research examined drafts written by 19 students who were enrolled in Kyoto University's Language and Culture program during the 2014-2015 fiscal year. As a result, three problems were observed; I) inadequacy in the co-occurrence relation of sentence elements, II) inadequate discussion structure, III) lack of descriptive and explanatory parts. II) seemed to be caused by flawed logical structure. In fact, some examples related to II) show that the argumentation was based on citations that were left critically undiscussed. The results indicate that these problems are influenced, not only by a lack of Japanese writing ability, but also by difficulties in acquiring the general scheme of academic writing.

(Part-time lecturer, The International Center, The Organization for the Promotion of International Relations,
Kyoto University)